

二〇一四年度入学者選抜試験問題

国語

(六〇分)

問題は□から■まで(16ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

成熟とはまずはひととして自活できるということであろう。食べ、飲み、衣をまとい、居場所をもち、仲間と交際することが独力でできるということ、つまりは自分で自分の暮らしをマネージできるということであろう。もっともひとは生活を他のひとと協同していとなむという意味では社会的なものであって、だから成熟とは、より正確には、社会のなかで自分たちの生活を自分たちでマネージできることである。そのかぎりではひとにおいて成熟とは、その生活の相互依存①のことをハイレジ②するものではない。産み落とされたとたんに見捨てられ、野ざらしになって死につきり③ということがわたしたちの社会ではよほどのことがないかぎりありえない以上、生まれ①るときもわたしたちは他のひとたちに迎えられるのであり、死ぬときも他のひとたちに見送られる。だれもが、生まれるとすぐだれかに産着を着せられ、食べさせてもらうのであり、死ぬときもだれかに死装束にくるまれ、棺桶④に入れてもらうのである。

成熟は成長とは異なる。成長は、誕生・成長・衰退(老化)・死という、生のリニアな過程のなかにその一フェイズとして位置づけられる。人間の場合は、ほとんどすべての社会で、この生き物としての成長(身体とその能力の成長)の過程にさらに子ども／大人という区分が重ね描きされている。生物学的な成長の区別⑤だけではなく、社会的な承認／未承認⑥というキハンの区別が、ひととしての生の過程のなかに差し込まれる⑦ということである。だから、未熟なまま⑧大人になる者もいるし、幼くしてすでに成熟している者もいる。

ところが、生産手段の機械化とともに社会が幼い子どもたちを早くから労働力として求めなくていいほど「豊か」になり、かつ社会のシステムがヒダイ⑨して「大人になる」ために修得しなければならない知識や技術の量も飛躍的に増大するなかで、学習の期間がどんどん長くなり、いまや大半の子弟は保育園から高校卒業まで十五年間ほど、大卒の場合だと十九年間、学校という集団教育の場で生活することになった。大人になるための通過儀礼が学校教育として制度化されることで、いまや子どもと大人のはざまが膨れ上がり、「純粹」な子どもである期間よりも、子どもから大人に移行する、子どもか大人かよくわからない

期間のほうが、はるかに長くなった。さらに卒業して会社に入ってもやはり最後まで「階段」を上らねばならず、つねに「成績」が問題とされ、ついに「窓際」に追いやられるまで、会社もほとんど学校のようなものとなった。いつも途上にあるものとして、生涯自分をまるで通過儀礼中の存在であるかのように感じるという、奇妙な時代になった。³中高年も未成年もみな、自分が大人か子どもかわからない、そんな奇妙な社会である。

そしてそのような社会のなかで、わたしたちは（いのちの）ベーシックスのほとんどを、専門家による社会サーヴィスに委ねている。そして、いざというときに何をしたらよいのか果然とする、そんな受動的で無力な存在になっている。これ以上向こうに行くとは危ないという感覚、あるいはものごとの軽重の判別、これらをわきまえてはじめて「一人前」だったはずなのに、その危機感覚、その価値の遠近法がわたしたちのなかから消えかけている。「われわれは絶壁が見えないようにするために、何か目をさえぎるものを前方においた後、安心して絶壁のほうへ走っている」——。*パスカルが紙片に遺したこの言葉が異様なほどリアルに響くのが、わたしたちの時代だ。

時代がその構造の硬直によって破綻しかけているときに、その構造⁴ヘンカンのエネルギーと智慧を供出しているのは、この社会、この時代の（外）にあるもの、ありうるものへの感受性である。そうした（反世界）へのまなざしとでも言いうるものこそが、この世界を脱臼させ、世界をふたたび可塑的なものへと戻し、ひいては世界を生きのびさせもする。世界を別様にも想像しようということ、⁴そのことが世界の変動期にあってはもつとも必要なものだ。そこでは、わからないものの、理解できないものに開かれていることが大きな意味をもつ。わからないことがらに対処する智慧をもつということが成熟であり、わからないことがらを手持ちのわかつていることがらに還元するのではなく、わからないことがらについての感受性をたっぶりもって開きっぱなしになっているというのが大切なことなのである。そしてこれこそ、未熟者の特権なのである。

なぜ、未熟さを生の奥深くまで孕んでいることが重要なのか。一見無駄とか、夢想だとか、非合理だとか、非現実だとか見えるものは、この世界にうまく位置づけようがないという意味で、この世界の枠外に放逐される。が、この（外）こそ、「大人」

たちがかまけて^{*}いる社会のロジックを相対化するものである。このことに関連して、井上ひさしさんがこんなシテキ^⑤をしている。

昔話の伝わり方を考えてみますと、祖父母から孫です。老人たちは世の中から引退している。子どもたちはこれから育ち、世の中へ参加しようとしている。世の中を通り抜けて来て生の国から死の国へ移ろうという人たちと、生の国から生れてきたばかり、これから世の中へ出ていくひとが、いろいろ端やふとんのなかで結びつく。両者のあいだにいる親たちは世の中に出て一所懸命働いている。その親たちもやがて年寄りになる。そして今度は子どもたちが親になる。その子どもとかつての親がまた話する。このように互い違いになりながら話や体験が伝わっていく。

〔老Ⅱ若・男Ⅱ女の対称性〕

こういう老人と孫とのつながりが、「大人」の世界の対極としてあって、その両極性が、表と裏、中心と周縁、上と下、海と山、天と地、昼と夜、夏と冬と同様、文化の活力を生んでいたと、井上さんは言う。「生れてきて五、六年の命と死ぬまで五、六年の命が、真ん中に働くお父さん、お母さんを置いて向い合う。この対称同士が互いに結びついて、やがて真ん中の働く者を創^{つく}ってゆく。この対称性があらゆるところからなくなっていつており、社会的な活力が落ちていく」と。

ここから考えられるのは、老性と幼性には、枯淡とか弱々しさ、しおらしさと可愛らしさ以上に、破壊的な性格があるのではないかということである。それは「大人」の観念によつてかたちづくられてきた秩序を一時失効させるような、あるいは破壊するような、そういう破壊性である。そういう〈反世界〉を醸成するものとして、老人と子どもの隔世代的なつながりがあったと、井上さんはここで言いたいではなかったか。そしてそのことが〈世界〉というものを厚くしていた、と。

それはあきらかに「大人」たちがかまけている「成長」とそのための効率性の論理の裏側にあるものである。成熟もまたそのような破壊性を内蔵したものとイメージする必要があるのではないだろうか。いつでも（世界の〈外〉に出るという意味で）未

熟になれる可能性を含んだものとなってこそ、ひとは成熟したと言えるのではないだろうか。そしてさらに言えば、子どもが一日も早く大人の世界——「成長」とそのための効率性の論理に支配される世界——に参入することを求められるのではなく、子どもそのまま子どもとしてのあり方を享受できるような社会、老人が老人として大人の世界から退場してゆくのではなく、老いの時期としての時間に重要な意味を見いだしながら生きてゆける社会、それが成熟した社会⁶というものではないだろうか。

もういちど言うっておこう。これ以上向こうに行くとは危ないという感覚、あるいはものごとの軽重の判別、これらをわきまえてはじめて「一人前」である。ひとはもつと「大人」に憧れるべきである。そのなかでしか、もう一つの大事なもの、「未熟」は護れない。われを忘れて何かに夢中になる、かちつとした意味の枠組みに囚われていないぶん世界の微細な変化に深く感応できる、一つのことに集中できないぶん社会が中枢神経として異なるとは異なる時間に浸ることができる、世界が脱臼しているぶん「この世界」とは別のありようにふれることができる、そんな、芸術をはじめとする文化のさまざまな可能性を開いてきた「未熟」な感受性を、護ることはできないのである。

(鷺田清一『わかりやすいはわかりにくい?——臨床哲学講座』による、一部省略した箇所がある)

【注】 *リニア〓線上。 *フェイス〓局面。

*通過儀礼〓人の一生で、ある段階から別の段階に移る際にとり行われる儀礼。

*パスカル〓フランスの哲学者・数学者・物理学者。

*可塑〓変形しやすい。 *放逐〓おいやること。

*かまける〓一つのことにところを取られて、他がおろそかになる。

*ロジック〓論理。

問一 〓部①～⑤のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二 〓線部1「生まれたときも……入れてもらう」とあるが、ここに示される生活のあり方を筆者は何と表現しているか。文中から五字以内で抜き出して答えよ。

問三 〓線部2「未熟なままで大人になる者」とは、どのような人のことか。成長と成熟の違いに触れて説明せよ。

問四 〓線部3「中高年も未成年もみな、自分が大人か子どもかわからない、そんな奇妙な社会」とあるが、これが「奇妙な社会」だというのはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 人々が自分で自分の暮らしをマネージできない社会は、人間としての「一人前」の基準が大きく変わってしまった社会ということになるから。

イ 成長を遂げて大人になったと実感できる人間がない社会は、危機感や価値観をわきまえて社会を担

う者が存在しない社会ということになるから。

ウ 学校を卒業して会社に入ったのちも大人として階段を上り続けていく社会は、どこが頂上なのかかわらないうちに外に追いやられる社会であるから。

エ 子どもが早くから労働力として求められることがない社会は、子どもに社会の一員としての自覚をうながす時間を持たないけじめのない社会だから。

問五 〓線部4「そのことが世界の変動期にあつてはもつとも必要なものだ」とあるが、「そのこと」が社会や時代にな何をもたらすから必要なのか。説明せよ。

問六 〓線部5「『大人』の観念によってかたちづくられてきた秩序」の内容を説明した文として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 子どもが効率よく成長し、社会を支えていくこと。

イ 老人が社会から退場し、社会を外から眺めること。

ウ 子どもと老人とが強力に結びつき、社会に活力を

生むこと。

エ 子どもと老人とが自然に反発し、社会に厚みを与
えること。

問七 — 線部6「成熟した社会」とはどのような社会だと

筆者は考えているか。次に挙げる語をすべて用いて説
明せよ。

「未熟」「未知」

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

あたし(相野美由)は、ちょっとしたきっかけから、中学で吹奏楽部に入り、愛沙と出会って楽しく過ごしていたが、フルートにのめりこむことのない自分を感じていた。中学二年のコンクールで県代表を逃したとき、愛沙に「本気じゃなかったでしょ」と言われ、吹奏楽部を辞め、本気でやりたいことを考えなかった自分を後悔しながら残りの中学生生活を送った。今までの自分を変えようと決心して、高校の入学式を迎えた翌日の出来事である。

とん。背中に感じた指先の感触に、あたしは振り返った。眼を大きく見開いていたと思う。

久樹さんが顎を引いてあたしを見詰めていた。

「驚かしちゃった?」

「あ……いや、うん。別に」

「ごめん」

それだけ言うと久樹さんは、指を握り込んだ。

「ごめんって……」

「昨日のこと」

「昨日、何かあったっけ?」

「物を言わなかった。相野さんが声をかけてくれたのに、ろくに返事しなかったから、さ」

「ああ、あれ。あのことを今、謝ってんの」

「そう。謝ってんの。いつ謝ろうかって、ずっと考えてた。今がチャンスだと思ったから」

あたしは口を軽く開けて、久樹さんを見る。あたしと久樹さんの席は隣同士だ。謝るチャンスなんて幾らでもあっただろう。

朝、顔を合わせたとき、体育館へと歩いていく途中、

ホームルームが終わった後、「昨日はごめんね」とあっさり告げればすむことだ。ほんとうに、ただ、それだけじゃないか。

「別にいいよ。気にしてないし」

あたしは手を左右に振ってみた。

「相野さんは気にしてなくても、あたしは気になったの」

久樹さんが唇を一字に結ぶ。こちらを撥ねつけるような尖った表情が現れる。二、三秒の後、その唇が緩み、表情が緩む。あたしは、何故かしら息を吐いていた。

「……ごめん」

久樹さんが頭を僅かに下げる。

「今のごめんは、何に對して？」

「きつい言い方したから」

久樹さんもため息を漏らす。

「癖なんだよね、この言い方。治らないんだ。別に、相野さんのこと怒ってるわけじゃないから」

「わかってる」

答えてから、驚いた。

わかってる？ 美由、あんた何をわかってるの。久樹さんのことなんて、何にも知らないくせに。

あたしの中で、あたしが叫ぶ。

そう、あたしは久樹さんのことを名前以外、ほとんど知らない。でも、嘘をついたとも出まかせを口にしたとも思わない。あたしは、確かに感じたのだ。

久樹さんは、あたしに腹を立てているわけじゃない。あたしを厭うても嫌ってもいない。拒むつもりもない。かといって、仲良くなりたいたいか、この子とは気が合いそうとか思っているわけでもない。ちゃんと謝ろうとしただけなのだ。

すごい、不器用なんだ。

「ごめん」の一言をさらりと口にできないほど、本気で

謝ろうとするほど不器用な人なんだ。

あたしは振り返ったまま、久樹さんを見詰めていた。ちよつぱり赤らんだ頬が肌の白さを際立たせて美しい。

とん。背中に誰かの指先が当たる。

え？ また？

前に向き直ると、菰池くんの眼とぶつかった。

うわっ、今日は何事？

大げさではなくのけぞりそうになる。

「先生、睨んでるよ」

菰池くんは、あたしの背中をつついた指を前に向けた。

同時に、

「こら、一年二組女子、約二名。名前は勘弁してあげるけど、私語は慎みなさい」

と、加藤先生の叱咤が飛んでくる。思わず身体を縮めていた。

ありがとう。

菰池くんに、口の動きだけで伝える。菰池くんは、指で丸を作って頷いた。

「重ねてごめん。タイミングを間違えた」

背後で久樹さんがささやく。電報の文面みたいだ。必要

最低限のことしか伝わってこない。とても単純で、わかり易い。余計な修辞がない言葉って、こんなにすっきりしているんだ。

あたしは感心してしまう。そして、笑ってしまう。

おかしい。

久樹さんって、おかしい。

ずっと機会を窺っていたくせに、最悪のタイミングで謝ってくるなんて、ほんとに不器用だ。その不器用さがおかしい。お腹の底からふわっと温かくなる。温かなおかしさだ。

「さて、ここからは、少し緩んでもらいましょうか。みんなのお楽しみの時間に移ります」

加藤先生の声が響く。あたしは、顔を上げ視線を前に向けた。

「それでは、HSB12、後はよろしく」

片手を突き出し腰を屈めた姿勢のまま、加藤先生が退く。直後、壇上にマイクを手にした生徒たちが現れた。

「新入生のみなさん、初めましてえ。わたしたちはHSB、つまり放送部の十二人でえす。よろしくお願いします」

女生徒の、よく通る澄んだ声につられるように、拍手が起こった。

「はい、ここからは、新入生のためのクラブ紹介の時間となります。わが、桜蘭学園高校には十一の運動部と同じく十一の文化部があります。原則として、生徒は全員クラブ活動に参加しなきゃなりません。でも、決められているからじゃなくて、クラブ活動で楽しもう、高校生活を本気で楽しもうって気持ちで、どんどん、入部してください。

もう入部先を決めている人も迷っている人も、桜蘭学園高校、二十二のクラブ紹介、最後までおつきあいください。制限時間は三分、その間に、新入生の心を掴めるでしょうか。まずは、ダンス部の登場です」

照明が消える。場内がざわついた。

(中略)

笑いと拍手が渦巻く。あたしも笑って、手を叩いた。

どの部もパフォーマンスが上手だ。

「あほくさ」

眩きが聞こえた。

X

一言だ。弾んで明るい声の中

Y

を感じる。シャボン玉の中に

交ざったガラス玉を連想した。同じ玉なのに、まるで違

う。

あたしはゆっくりと久樹さんに身体を向けた。

「あほくさいって言った？」

「言った」

「野球部があほくさい？」

「どの部も」

「なんで？」

「ふざけすぎ。本気で伝えようとしていない」

美由、本気じゃなかったでしょ。

愛沙と久樹さんの言葉が重なる。

ああ、ここでも本気か。

「ふざけてもいいじゃない。ただの部活の紹介なんだから。真面目にやられるより、おもしろいほうが、ずっといいよ」

あたしは知らぬ間にこぶしを握っていた。

本気、本気、本気。

美由、本気じゃなかったでしょ。

あたしは本気なんだよ。本気で吹奏楽をやったの。美

由とは違うんだから。

本気、本気、本気。

もういいかげんにしてほしい。

「なんで本気じゃないと駄目なわけ？ いつも、本気で何かしてないと駄目なわけ？」

「かしてないと駄目なわけ？」

久樹さんが顎を引いた。眉間にくつきりと二本、皺が寄る。

言い過ぎた。

痛いほど強く唇を結ぶ。もちろん、遅い。いくら強く噛みしめても、流れ出た言葉は消えない。しかも、今、あたしは久樹さんに当たり散らした。明らかになつ当たりだ。

「……ごめん」

謝るしかなかった。謝っても取り返しがつかないかもしれない。でも、謝るより他にできることはない。

「ごめんなさい。今の最低の八つ当たりだった」

「早いね」

「え？」

「謝るの、早い」

「だって……悪いのあたしだもの。それがわかってるから、謝らなくちゃって……」

4 久樹さんがため息を吐いた。長いため息だった。久樹さんの身体が一回り縮んだように見える。

「できないんだよね」

「うん？」

「わかってても、できない」

「謝るのが？」

久樹さんが頷く。眉が下がり、皺が消えた。

「あたしが悪いって、わかってても、すぐに謝れない。どう謝っていいか、わかんなくなる」

「どうって……」

「ごめん。ごめんね。ごめんなさい。すみません。申し訳ありませんでした。許してね。」

謝るための言葉は幾つもある。久樹さんがそれを知らないはずがない。知っているのと口に出るのは、別ということだろうか。

「相野さんの早業、すごい」

「いや、早業って、拳銃けんじゅうを撃つてるわけじゃないし」

悪いと思つたら、謝れるでしょ、フツー。

その一言を飲み込む。

久樹さんは、丸一日、かかった。

「いいかげんじゃだめだ。ちゃんと謝らなくちゃ。そう思つたら、悩む。悩んだら、どんな風に謝つたらいいか、ま

すまず、わからなくなる」

久樹さんの物言いは、ぶつつぶつと断ち切るようで、正直、聞きづらい。でも、わかった。ちゃんと、耳の中に、あたしの中に入ってくる。⁵確かな響きがあるのだ。何だろう、低音域をしつかり支える楽器、金管ならチューバとか弦楽器ならコントラバスとかに似ているのだろうか。久樹さんの声質が低いわけじゃ決してないのに、⁶高く澄んで軽やか⁷ではなくて、⁸低く豊かで力強い⁹印象を受ける。きつと、久樹さんがそんな人なんだろう。

フルートじゃなく、チューバのような人。

「早く謝る人って、いいかげんな人が多い」

と思う。そう付け加えて久樹さんはさらに、でもと続けた。

「でも、相野さんはいいかげんじゃなかった。本気で謝ってくれた。そういうの、すごい早業じゃない」

「え……そうかな」

頭の中を一瞬、カウボーイハットのガンマンが過つた。

父さんの好きだった古い映画の場面だ。題名は忘れた。最初から覚えていなかったのだろう。

父さんが家を出て行ったとき、あたしはまだ三つとか四

つとかで、ほとんど何も記憶していない。なのに、父さんと見たテレビ映画の一シーンがふっと脳裏に浮かぶ。

ガンマンは目にもとまらぬ早業で、自分の前に立ちふさがる悪人たち(おそらく悪人だろう。悪人じゃないと、あっさり殺したりしないもの)を次々と倒したのだ。父さんの膝の温もりと煙草の匂い、悪人の死ぬ場面。あたしは、まだ、そんなものをあたしの中に残していたのだ。久樹さんの早業発言に触発されて、古い古い記憶がよみがえる。そして、本気。

そうか、久樹さんって、いつも本気なんだ。いいかげんにとか適当にとかが出来ない人なんだ。

やっぱり不器用だな。

こんなに整った顔立ちをしているのに、手も脚も長く、羨ましいほどのモデル体形なのに、そこに居るだけで注目を集めちゃうのに、とっても不器用なんだ。

「久樹さん」

「なに」

「練習したら」

「謝る練習？」

「そう。本気で謝るなら、やっぱり早い方がいいよ。早く謝

るからいいかげんっての、久樹さんの偏見じゃない」

「そうかな」

「そうだよ」

「だって、あたしの周り、多いよ。すぐに謝る人。すぐに謝って、数秒後には何を謝ったのか忘れてるやつ」

忘れてるやつが誰なのか、あたしは尋ねなかった。そこまで踏み込んじゃいけない。線を越えちゃいけない。しゃべりたくないことを執拗に聞き出すのはルール違反だ。あたしたちのルールに反する。

「そういうやつと久樹さんが一緒にならなきゃいいんじゃないの」

久樹さんの眼がまともにあたしに向けられた。真っ直ぐな視線が、遠慮も戸惑いもなくぶつかってくる。

こういうところも不器用だなあ。

美人だから器用だなんて決め付けはしない。でも、器用に、楽に生かされるんじゃないかとは感じてた。うーん、あたしの方が偏見強いかも。

「簡単に言わないで。それができるんだったら、苦労しない。あたしだって、こつちが悪いとわかってるんなら素直に謝ろうって、思う。でも、『ごめん』ですませたくない。

『ごめん』って謝っておしまいにしたくない」

「じゃあ、どうしたいわけ」

「ちゃんと本気で謝りたいの。わたしは、ちゃんと本気で謝ってほしいから、いいかげんに謝られたりしたら、すぐむかつく。そんなんだったら、謝ってもらわないほうが百倍もいいよ」

「屁理屈だよ、そんなの」

あたしは少し、面倒臭くなってきた。でも、久樹さんの一言一言に心が疼きもする。頷きもする。

いいかげんに向かい合ってもらいたくない。謝るにしても、論ずにしても、褒めるにしても、叱るにしても本気で、そう、本気で向き合おうとしてほしい。

わかると感じる。

わかるけど、ごちゃごちゃ考えたくない。考えてもしかたないとも感じてしまう。

久樹さんの眉間にまた、皺が寄った。

「あたしは思ったことを言っただけ。屁理屈って言われたら、それで全部終りになっちゃう。そういうの、卑怯だよ」

「卑怯……」

「でしょ。面倒臭くなったら、屁理屈だって逃げちゃうの。いつつもそう。そういうの卑怯だよ」

「久樹さん、誰のこと言ってるの」

少なくとも、あたしのことではないらしい。久樹さんは、口をへの字に曲げ、黙り込んだ。あたしも、口を結ぶ。

言葉が足りない。あたしも久樹さんも、言葉が足りない。かといって、どこにどんな言葉を補えばいいのか、見当がつかなかった。

あたしは久樹さんのきれいな横顔を窺う。拒否のオーラは出ていなかった。怒ってもいないみたいだ。あたしも久樹さんを拒もうなんて思わない。むしろ、もうちょっと話したい。

⁶ 久樹さんと話していると疲れる。面倒臭い。なのに、話したい。久樹さんって人をもう少し知りたい。

(あさのあつこ「アレグロ・ラガツア」による)

問一 — 線部1「あたしは口を軽く開けて、久樹さんを見る」とあるが、なぜこのような表情になったのか。説明せよ。

問二 — 線部2「お腹の底からふわっと温かくなる」とあるが、どのような気持ちか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 率直だが、社交性のない変な人ではないかとひそかに軽んじている。

イ 不器用なやり方に、苦勞の多い人ではないかとわずかに同情している。

ウ 面白いやりとりに、明るく楽しい人ではないかとほのかな親近感を感じている。

エ ぶつきらぼうだが、嘘のない誠実な人ではないかとかすかな好意を感じている。

問三 空欄 X · Y に入れるのに、最も適切な組み合わせを次の中から選び、記号で答えよ。

ア X硬い Y硬さ イ X軽い Y軽さ

ウ X暗い Y暗さ エ X強い Y強さ

問四 — 線部3「明らかな八つ当たりだ」とあるが、なぜ八つ当たりをしたのか。説明せよ。

問五 — 線部4「久樹さんがため息を吐いた。長いため息だった」とあるが、このため息には、久樹さんのどのような気持ちが表れているか。説明せよ。

問六 — 線部5「確かな響き」とあるが、聞きづらくとも「あたし」の中に入ってくる久樹さんの言葉とは、どのようなものか。説明せよ。

問七 — 線部6「久樹さんと話していると疲れる。面倒臭い。なのに、話したい。久樹さんって人をもう少し知りたい」とあるが、「面倒臭い」のに「話したい」と考えるのは、「あたし」の自分自身に対するどのような気持ちの表れか。説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

昔あるところに貧しい若い侍とその妻がいた。妻は出産し、しきりに肉を食べたがったが男はそれを手に入れることができなかつた。そこで男は弓に矢をつがえ、自ら鳥をしとめようと池に出かけていった。

池の辺りに寄りて、草に隠れて伺ひ居たるに、鴨の雌雄、人ありとも知らずして近く寄り来たり。男これを射るに、雄を射つ。極めてうれしく思ひて、池に下りて鳥を取りて、いそぎて家に返るに、日暮れぬれば夜に入りて来たり。妻にこの由を告げて、喜びながら、「朝に調美して妻に食はしめむ」と思ひて、棹のあるに打ち懸けて置きて臥しぬ。

夫、夜半ばかりに聞けば、この棹に懸けたる鳥ふたふたとふためく。しかれば、「この鳥の生き返りたるか」と思ひて、起きて火を灯して行きて見れば、死にたる鴨の雄は死ながら棹に懸かりてあり。傍らに生きたる鴨の雌あり。雄に近づきてふためくなりけり。「早う、昼池に並びて食みつる雌の、雄の射殺しぬるを見て、夫を恋ひて、取りて来たる尻につきて、ここに来にけるなりけり」と思ふに、男忽ちに道心おこりて、哀れにかなしき事限りなし。

しかるに、人、火を灯して来れるを恐れずして、命を惜しまずして夫と並びて居たり。これを見て男の思はく、畜生なりといへども、夫をかなしぶが故に、命を惜しまずしてかく来れり。我れ人の身を受けて、妻をかなしむで鳥を殺すといへども、忽ちにかく完を食はしめむ事を慈しびて、寝たる妻を起こして、この事を語りて、これを見しむ。妻亦これを見て、かなしぶこと限りなし。遂に夜明けて後も、この鳥の完を食ふ事なかりけり。夫はなほこの事を思ふ道心深くおこりにければ、愛宕護の山に貴き山寺に行くに、忽ちに髻を切りて法師と成りにけり。その後、ひとへに聖人と成りて、ねむごろに勤め行ひてなむありける。

これを思ふに、殺生の罪重しといへども、殺生によりて道心をおこして出家す。しかれば皆縁ある事なりけりとなむ語り伝へたとや。

(『今昔物語集』による)

【注】

*調美||調理。

*尻につきて||後を追って。

*道心||仏道を信仰する心。

*畜生||鳥・獸・虫・魚の類。

*完||肉。

*慈しびて||哀れに思つて。

*愛宕護の山||京都市北西部にある山。山中に寺があつた。

*髻||頭上でたばねた髪。

*聖人||徳の高い僧侶。

問一 —— 線部1「この由」とは「事の次第」との意である

が、ここではどのようなことを指すか。最も適切なもの

を次の中から選び、記号で答えよ。

ア 鴨を手に入れられなかつたこと。

イ 鴨の雄をしとめて持ち帰つたこと。

ウ 鴨を取るためのわなをかけたこと。

エ 鴨のつがいを得ることができたこと。

問二 —— 線部2「この鳥」とは具体的に何を指すか。文中

から三文字で抜き出して答えよ。

問三 —— 線部3「これ」の指す内容を説明せよ。

問四 最終的に男はどうしたのか。説明せよ。

問五 —— 線部4「皆縁ある事なりけり」とはどのようなこ

とを述べているのか。最も適切なものを次の中から選
び、記号で答えよ。

ア 生き物の命を奪うという罪深い行動が信仰心につ
ながつたことについて、悪事が仏の世界に入る原因
となり得ると述べている。

イ 男は真面目に暮らしていることを仏に評価され食
べ物を与えられたとし、諦めず努力することが将来
につながるると述べている。

ウ 出産という大事にあつては正しい判断ができない
こともあるが、後にそれを悔いることで徳を積むこ
とができるると述べている。

エ 夫婦の互いへの愛情は人間でも鳥でも変わりはない
のだと気づいたことで、生き物の命を尊重するこ
との大切さを述べている。